

【目は見ようとする】(興味論)

「目は見ようとし、耳は聞こうとし、足は歩もうとし、手はつかもう(つくろう)」とする。心は信じ愛せようとする。精神は考えようとする。人間の本性のそれぞれの素質の中には、その不活発で不器用な状態から、形成された能力へと自身を高めようとする衝動がある」……これはペスタロッチーが『白鳥の歌』(一八二六年)で述べたことです。子ども・人間の中にある《衝動》を肯定的にとらえ、人間に必要なのだと理會しています。

問題は、《何を》見ようとするのか、《どう》見ようとするかです。衝動の対象がはつきりする程度、社会と関わる深さの程度によって、衝動は、《興味Ⅱ目的》へ、そして《職分》(職業を支える契機)に高まっています。《見たいこと》などが《それで食べて生きていくこと》にまでつながっていきます。

生活教育で「子どもの興味・関心を大切にすると、このようなひとつなかりを大切にすることで、時々理會される発達課題は職業陶冶にまでつながっていきます。

生活教育 キーワード

「《何が》見たいのか、したいのか」がはつきりわからない場合でも、何か具体的に示された時、「それではないんだ！それはちがうんだ！」ということは明確にわかっています。ちがうのに押しつけられるとむかつきます。怒りが湧いてきます。こういう時に、「衝動的」「感情的」に振る舞いがちだし、「問題行動」のように見られます。《何か》の《何を》と一緒にさがそうとするとき、衝動的な行動は興味・目的に発展し、おだやかでのびのびした感情になっていくでしょう。

自分では興味がないと思うことでも《興味のある人(あこがれの人)》の《興味のあること》には興味を湧いてきます。また、友だちの興味を聞いているうちに、それが自分の興味になってくることもあります。興味は、他の人から貰ったりあげたりすることができのです。

(研究部・加藤聡一)

文献①

ペスタロッチー(東岸克好他訳)『隠者の夕暮・白鳥の歌・基礎陶冶の理念』玉川大学出版部 一九八九年。九二頁。

文献②

デューイ(松野安男訳)『民主主義と教育(上・下)』岩波文庫、一九七五年。特に第十章が「Interest論」。